詠む広場

毎日俳壇

井上　康明　選

春めきし空の青さの中にゐる
東　京　岩垣　皓之
△評▽まだ寒さは残っているが、春めいて柔らかくなった青空の中に作者はいる。はるかな空の果てから、春はやって来る。

ポケットに校庭の石卒業す
土浦市　今泉　準一
△評▽卒業する生徒のポケットに石が一つ入っている。朝夕遊んだ校庭の、思い出の石である。

雁舞ふ空海の池おぼろ
高松市　島田　章平

春禽のゆれたる枝に戻らざる
宇陀市　泉尾　武則

蠟梅の香を全身に寺歩く
久留米市　持地　恒美

月満つること疑はず西行忌
福岡市　三十田　燦

国道十六号菜の花の揺れどほし
相模原市　小山　鞠子

板書するチョークの音やヒヤシンス
つくば市　小林　浦波

色薄きことあやまたず薄紅梅
東　京　望月　清彦

春疾風富士より雲を放ちけり
倉敷市　中路　修平

片山由美子　選

閉店のあすなろ書房燕来る
川越市　峰尾　雅彦
△評▽ツバメが南方からやってくる春、書店がまたひとつ閉店に。未来への希望を託して名付けた「あすなろ書房」のはずだが。

面会のかなはぬままに春落葉
松山市　井上　保子
△評▽入院中の人に会いたいと思いつつ許されない病状だったのか、結末を季語が暗に語る。

物干しのシャツがよろこぶ春の風
平塚市　高橋　佳代

予備校への道懐かしや風光る
東　京　林　半寿

雲ひとつ無き日のつづき梅盛り
東　京　小栗しづゑ

学生でふくらむバスや春の雪
和歌山　桑原　里美

風に舞ふ風船を追ふ子犬かな
相模原市　はやし　央

春めくや水面に泡の二つ三つ
つくば市　村越　陽一

風光る港見下ろす観覧車
東　京　徳原　伸吉

集まれば昔の話冬帽子
飯塚市　倉田　幸男

小川　軽舟　選

雲淡く日の暈淡く水温む
野洲市　宮田絵衣子
△評▽空の描写がていねいで春らしい。そこから作者の立つ地上に目を転じて、季語の「水温む」でまとめた構成がよい。

浜風の吹き抜ける路地細魚干す
新居浜市　寺村　洋子
△評▽漁を終えた漁村の路地の静けさ。揚がったばかりのサヨリが銀色の細い身を光らす。

佐保姫のさきぶれの風尖りくる
久喜市　利根川輝紀

鳥の恋独身寮の日曜日
広島市　村越　縁

読み返す故郷の記事春隣
行田市　吉田　春代

料峭や川原に下りて石伝ひ
北九州市　浅野　家興

浮雲へ向かふ自転車春隣
大津市　横川　和醸

ワイパーの動きこきこき春の雨
倉敷市　中路　修平

灰皿のある喫茶店納税期
大和高田市　楠　伸治

病窓に小さく振る手や春浅し
福岡市　立川　純子

西村　和子　選

雛壇に近づけばすぐ抱きとられ
神戸市　中林　照明
△評▽主語はよちよち歩きの幼子。きれいに飾ったひな壇のあれこれに触りたがり、倒したり汚したりする。その寸前を描いた。

真っ直ぐに歩いたつもり雪の原
小林市　黒木　暢
△評▽振り返ってみると曲がっている。意志と現実との微妙な違い。他には足跡もない雪原。

処方薬化粧ポーチへ春の風邪
京都市　古川麻美子

二度拭いて尚もざらつく春埃
横浜市　斎藤　山葉

春の雪だよひながらまだ落ちぬ
西宮市　平田　あい

雪道をこけつまろびつ下校の子
米子市　永田富基子

明るみて暗みて春の雪しまく
野洲市　宮田絵衣子

わが作りわが褒めて食ふ菜飯かな
直方市　岩野　伸子

知らぬ者同士声かけ雪の午後
長岡京市　みつきみすず

猫抱けば日向の匂ひ日脚のぶ
甲府市　山田　敦子

新刊

＜句集＞

◇綾部仁喜『綾部仁喜全句集』　＜いつまでもいつも八月十五日＞などで知られる著者の全句集。既刊4句集及び「俳句日記」「『沈黙』以後」「補遺・『鶴』」投句時代」を収める。藤本美和子による著書解題、年譜、初句索引、季語索引を付する。気管切開手術により声を失ってから10年あまりを病床にありながら、著者が透徹したまなざしをもって句業をつづけたことは驚異的である。長く主宰した「泉」誌の現主宰や同人の協力で、著者の青年期から逝去するまでの足跡が鮮やかに見えてくるのもいい。

また第1句集以前の水原秋桜子、石田波郷、石塚友二の選を経た全作品を収録したことで、「選とは何か」を読者に問いかけてくれるのもいい。全作品を読めるよろこびとともに、著者の息づかいが聞こえてきそうな一冊である。

＜寒木を寒木として立たしめよ＞＜声なくて唇うごく暮春かな＞＜よろよろと畦（あぜ）のかよへる春田かな＞（ふらんす堂・8800円）

（俳人・櫂未知子）

＜歌集＞

◇川野里子『短歌って何？と訊（き）いてみた』　赤坂憲雄、伊藤比呂美、品田悦一、高野ムツオ、新見隆、堀田季何、三浦しをん、宮下規久朗ら計15人との対話集。ジャンルを超え、詩人、俳人、民俗学者、美術史家等との対話を通して短歌という詩形の新たな面を探り、本質を問いかける。（本阿弥書店・2750円）

◇田中徹尾『和（にこ）の青空』　日常の出来事によって生じる感情の起伏を丁寧にとらえた第4歌集。初めての女孫の名を歌集の題につけて喜びの大きさが伝わる。＜三度目の退職まぢかな春の朝通勤途中の花咲きそむる＞（短歌研究社・2200円）

◇森澤真理『地吹雪と輪転機』　冬の情景の「地吹雪」と新聞社の昔ながらのシンボルである「輪転機」が印象的な第1歌集。新潟日報社の女性記者として長く奮闘してきた日々を詠む。＜校了の青きインクは油染み朝焼けのなか雨来る気配＞（六花書林・2420円）

（歌人・中川佐和子）